

国際学院埼玉短期大学

創立以来、未来を担う人づくり教育を信念に

『豊かな人間力』と『確かな専門力』の獲得を支援

本学は、「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」の5つの言葉からなる建学の精神を揚げ、「礼をつくし、場を清め、時を守る」という教育方針を謳っており、開学以来、専門知識や技術を修得し、人間性豊かな人材育成を目標とした「人づくり教育」を行っている。

教育環境は時代に応じて変化を続けているが、本学ではその変化に柔軟に対応すべく、数々の教育プログラムに取り組み、高い評価を得ている。創立から55年を迎えた今、未来へつなぐ国際学院のブランドの確立を指揮する大野博之学長にお話を伺った。



国際学院埼玉短期大学
学長

おおの ひろゆき
大野 博之 氏

LEADER'S FILE

1957年（昭和32）、6月生まれ。1986年国際学院埼玉短期大学入職。大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会委員、文部科学省中央教育審議会専門委員（大学分科会）などを歴任。現在は、文部科学省大学設置・学校法人審議会委員（大学設置分科会）をはじめ、日本私立短期大学協会副会長、関東私立短期大学協会会長、埼玉県私立短期大学協会会長、短期大学基準協会理事など、高等教育の要職を兼務。

趣味はゴルフと囲碁。座右の銘は、中国の唐末に活躍された大禪匠、雲門文偃禪師の言葉「うんもんぶんえん日日是好日」。

料理や洋裁、茶道、華道など
多角な経営で基盤を築く

— 御校の創設は1963年（昭和38）ですが、創設の経緯など、沿革についてお伺いできますか？

私の父、現理事長が創設者になります。もともと父は埼玉県の職員で、食品衛生や公衆衛生分野に従事していたのですが、自らが養成教育を行い、必要な人材を育て上げようと一念奮起して学院を創設したのです。今でいう「脱サラ」で、周囲からは猛反対されたよ

うですが、父には「食」に対して殊更強い思いがあり、また、当時は高度経済成長期の真只中で、女子教育の必要性も訴えられていましたので、揺るぎない思いと熱意で創設に至ったと聞いています。

しかしスタートは順風満帆ではなかったようです。当時、私は10歳でしたが、学生集めにはかなり苦労していたと記憶しています。現在と違って告知方法も限られていた時代ですから、ポスターを一枚一枚貼るなど地道な告知を続けていましたね。

特に創設直後は眠れない日が続き、言葉に

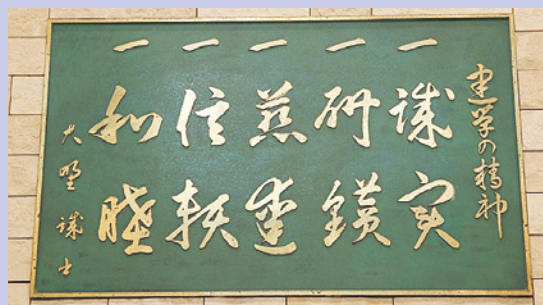
今後も建学の精神と教育方針を継承

開学以来、一貫して人格形成に重点をおいた『人づくり』教育に力を注いでいる本学は、「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」の5つの建学の精神と、「礼をつくし、場を清め、時を守る」という創設者の大野誠理事長の教育方針が基盤となっている。

教育や食を取り巻く環境が変化する中で、この精神と教育方針はこれからも変わりなく、学生に受け継がれることとなる。



理事長・学院長
医学博士 大野 誠



正面入り口に掲示されている
「建学の精神」

表せないような苦勞もあったのでしょう、何度もこの土地を手放そうと考えたこともあるそうです。生徒は十数人ほどで、料理学校だけでは生計は立てられませんから、お茶やお花、洋裁教室など、多角的な経営を始めることになるのですが、この多角経営が現在の学院の基礎を作ってくれたと思います。

——料理学院をベースに服装学院やクッキングスクールを開校するなど、次々と展開を続けられ、1971年には国際学院が学校法人の認可を受けられます。さらにその後は保育の方に新たな展開を始められますね。

次々と展開を可能にしたのは、当時の全体的な右肩上がりの社会風潮も要因でしたが、その根底には当学院創設のきっかけである「食」や「女子教育」への強い思いがあったからです。料理をはじめ、服装や保育分野などにおいて、調理師や栄養士、保育士などの専門的な人材を養成することで確固たる基盤を築きあげたことが新たな展開につながったと思います。

その後、1983年には幼児教育科と食物栄養科の2科から成る「国際学院埼玉短期大学」の設置が認可され、同年開学に至ります。実は当時、「高等教育計画」という計画があったのですが、これは、大都市への大学を抑制し、地方の大学の計画的整備を図るもので、この辺りは抑制の対象だったわけです。そうした厳しい時代において、本学が開学できたことは、専門学校として培ってきた教育内容や専門性、食に対する志など、これまでの実績を認められたことだと自負しています。

——2008年に学長にご就任されますが、就任当時の思いや決意、お気持ちをお聞かせください。

長年、副学長として携わっていましたが、学長と副学長とでは責任が全く異なりますし、気持ちの引き締まる思いでした。

特に就任当時は高等教育を取巻く競争が激

しくなっていましたので、相当の覚悟が必要だと感じました。私はよく「温故知新」と自分に言い聞かせているのです。古き良きものを継続しながらも、変化に対応していかないと取り残されてしまいますので、学長就任後から自分への大きなテーマとなっています。

本学の5つの言葉からなる「建学の精神」と「教育方針」は、いずれも理事長が本学の教育の柱として定めたものです。これらはしっかりと受け継ぎ、今後も教育理念として変わりないものですが、時代の変化に合わせて対応すべきものもあります。その一例として、2008年に「教育改革推進センター」を開設し、翌年には「学習成果に合わせた教学改革方針」を打ち出しました。また教育の改革だけでなく、運営者である事務局の意識改革も必要と考え、就任直後から改革のための制度づくりに着手しました。現在もその改革の真最中です。

文部科学省が高く評価する優れた教育プログラム

文部科学省では国公私立大学を通じた大学教育改革を推し進めており、優れた取組を選定し支援している。本学では2004年の「特色G P」を皮切りに4つの取組が選定された。選定後もそれぞれの取組に毎年創意工夫を重ね、現在も質的向上を図っている。



五峯祭



卒業研究

4つの教育プログラム

- | | |
|--------|---|
| 2004年度 | 「五峯祭（大学祭）」（特色G P）
－ 短期大学における自立創造力育成プログラム － |
| 2007年度 | 「卒業研究」（特色G P）
－ 卒業研究による短期大学専門教養教育の展開 － |
| 2008年度 | 「人間と社会」（教育G P）
－ テュートリアル教育による教養教育の充実 － |
| 2009年度 | 「就職支援」（学生支援推進プログラム）
－ 総合理解力の向上を図る就職支援プログラム － |



「人間と社会」の授業風景



就職支援

— 御校では、プロフェッショナルな人材と社会に貢献する良き社会人に育成することを目標とされていますね。学生に対して自らを高めてもらいたいという期待が感じられます。

日頃から学生には「豊かな人間力」と「確かな専門力」とわかりやすい言葉で説明しています。道徳や礼節を持ち出すまでもなく、人間性をきちんと持たなければ人から好かれませんが、協働社会においてコミュニケーションが築けません。また、いくら人が良くても専門性を有していないと社会では成長できませんから、在学中にしっかり基礎を養い、卒業後も自ら学び続ける力を身につけてもらいたいと願っています。

本学の教育方針の「礼をつくし 場を清め 時を守る」は、「当たり前のことを徹底してやり続けることで他と差別化が図れ、大きな結果を出せる」という「凡事徹底」とも言い換えられます。ごく当たり前のことなのですが、非常に大切なことです。

それを象徴するような卒業生のエピソードがあります。彼女が調理実習先で後片付けをしていた時の話です。使用した鍋や釜、調理

道具などを洗浄するのはごく普通で当たり前のことですが、彼女はゴミ箱まで洗ったそうです。その場にいた実習先の担当者は、即内定を決めたそうです。彼女は2年間の学生生活で教員や先輩の片づけ方を自然に覚えたのでしょう。ゴミ箱を洗うのは当たり前のこととして身につけていたのですね。

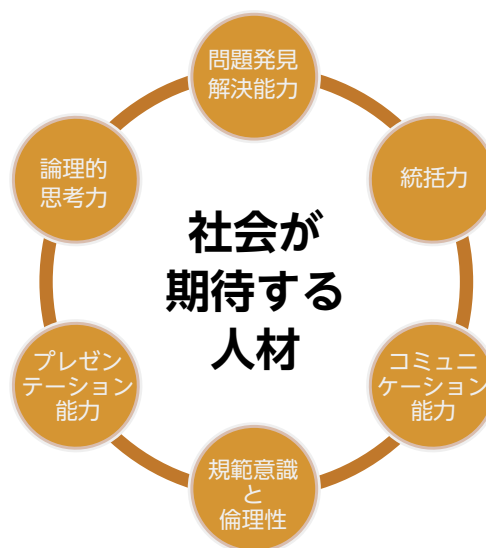
人間力と専門力を養う 特徴的な教育プログラムの数々

— 御校が掲げる「人間力」と「専門力」が身につく特徴的な教育の取組みについてお聞かせいただけますか？

本学の特徴的な教育の取組みは色々ありますが、開学以来毎年行っているものに「卒業研究」があります。短期大学の必修科目としては全国でも先駆けで、2年間の学修成果の集大成として位置づけています。

学生全員が研究論文を作成し、毎年2月に開催する卒業研究発表会では、各学科・専攻科の代表が発表を行います。発表会には全学生や教職員だけでなく、文科省の大学振興課の職員や、他大学教職員、卒業生や入学予定

■チュートリアル教育の目的



の高校生、就職先企業関係者、実習先の関係者など多くの方が参加くださいます。

本学が卒業研究を課す狙いは、学生が主体となって興味ある課題や問題意識を持ち、そのテーマについて文献やデータを収集し、まとめ上げる力をつけ、さらにまとめた内容を論理的・客観的に第三者にプレゼンテーションする力をつけることです。

経験もなく最初は不安だらけの学生たちですが、研究発表を終えた後の達成感や自己効力感（自分ならできるという自信）は、何物にも代えがたい大きな財産となります。卒業後、社会人として活躍する上でも人間力の形成になっていると思います。この「卒業研究」は、2007年に文科省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択されました。——「卒業研究」以外にも文科省に採択された教育プログラムがありますね。

2004年度には、「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」として、本学の大学祭、「五峯祭」を中心とした取組み（「短期大学における自立創造力育成プログラム」）が採択されました。

五峯祭は、日頃の学修成果の発表の場と位置づけています。全学生がグループを組織し、協力しながら研究や創作、自主的活動を展開します。五峯祭は、地域社会における幼児教育や食育などの振興にも貢献する場となっていて、地域住民はもちろん、県外の短期大学から視察団が訪れるなど、毎年多くの方で賑わいます。

また、2008年度には「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に採択された「チュートリアル教育(問題解決型学習)」も本学を代表する特徴的な取組みです。

本プログラムは入学から卒業までの2年間の必修科目「人間と社会」で実践しています。学生は数名のグループに分かれ、教員(チュータ)から与えられたテーマについて

問題点を見つけ、討議しながら解決策を探ります。高校までの教師から「教わる」授業と異なるため、1年次は戸惑う学生も多いのですが、テーマは学生たちが興味や関心のある身近なものばかりなので徐々に積極的になり、活発な意見が飛び交います。

討議後、グループごとに意見を発表し、他のグループからの質問や指摘を受け、最後にはチュータが総括を行い、学生たちはレポートを提出します。2年次には各学科の専門領域がテーマとなるため、より具体的で専門的な討議が行われます。

2年間の「人間と社会」を通じて学生たちは、問題の発見や解決能力だけでなく、コミュニケーションやプレゼンテーション、総括能力などが養われます。履修後のアンケート結果からも履修前と比べると自己評価が極めて高く、授業で得たことは本人にとっても大きな自信になっています。

さらに2009年度には「総合理解力の向上を図る就職支援プログラム」が「学生支援推進プログラム」に採択されました。過去4回の取組が採択されたことは短期大学としても全国的に稀で、県内では初となります。

——現在、新たに力を入れているプログラム等がございましたらお聞かせください。

2016年から「アクティブ・ラーニング」という反転授業のシステムを導入しました。これは授業映像の収録や配信、授業映像の視聴ログの確認、小テストの作成などを全てひとつのプログラムで統合的に行うシステムです。

学生は学内のパソコンやタブレットからこのシステムに自由にアクセスでき、いつでもどこでも授業を確認できます。また、授業中には電子黒板に学生が直接書き込めるなど、従来の受け身の一方通行の授業から、参加型の積極的な授業が行えます。

学生が興味や意欲を持って参加できる環境を整備し、実習をよりわかりやすくして学習意欲の向上につなげるのが目的です。現在は調理実習室と実験室、幼児保育のリズム教室の3つの実習教室に導入していますが、このシステムを実験・実習・実技の授業に導入したのは、本学が初とされています。

——御校は海外研修も積極的に行っていますが、国際展開を始めた経緯や目標などについてお聞かせいただけますか？

もともと理事長には、食のみならず、これからは国際的に活躍できる人材を育てたいという理念があったのです。現在は教養科目として海外研修を実施しています。異文化や他言語に接して国際的な感性を磨き、協調性を養うことも海外研修の大きな目的です。

特にオーストラリアでの海外研修については、健康栄養学科は国立シドニー大学、幼児保育学科はニューサウスウェールズ州立マッコリー大学と活発な交流を行っています。両大学の講義を本学の学生が受講し、研究論文を英語で発表するなど、大きな学修成果を上げています。2003年に両大学との教育提携の調印を行って以来、学生はもちろんですが、教職員の交流も深まっています。また、2006年10月には、カナダのバンクーバーアイランド大学（旧マラスピナ大学）とも姉妹校提携し、語学研修プログラムに希望学生が積極的に参加しています。

KGブランドの確立に向けて

——最後になりますが、短期大学を中心に、中学校、高等学校という国際学院全体の今後の経営方針についてお聞かせください。

建学の精神に基づいた人材の育成のために、国際学院のブランド「KGブランド」の確立を目指しています。2016年から5年計画を立てたところですが、5年ごとに見直しで実現したいと考えています。

現在は、以前と比べて社会環境や教育環境が大きく変化し、我々大学や短期大学には、学生を定めたゴールに到達できるように支援するシステムづくりが求められています。現在の学生は、意欲はあるのですが不安や悩みを多く抱え、自己肯定感が低い人が多いのです。サークル活動やアルバイトには時間を割くのですが、本業の学習時間が減少しているのです。

大学初「アクティブ・ラーニング」

学生の主体的な学びを育み、学習意欲や理解度を高めるアクティブ・ラーニングシステムを初導入。

実習、実験の3教室に導入されたプロジェクター型電子黒板、講義収録システム、LMS（学習管理システム）により、参加型授業が実現した。



天井に設置されたカメラで、手元が拡大表示。また、授業は自動録画され、繰り返し確認できる。



電子黒板では、予め電子資料に空白を作り、学生が直接文字や絵などを記入できる。

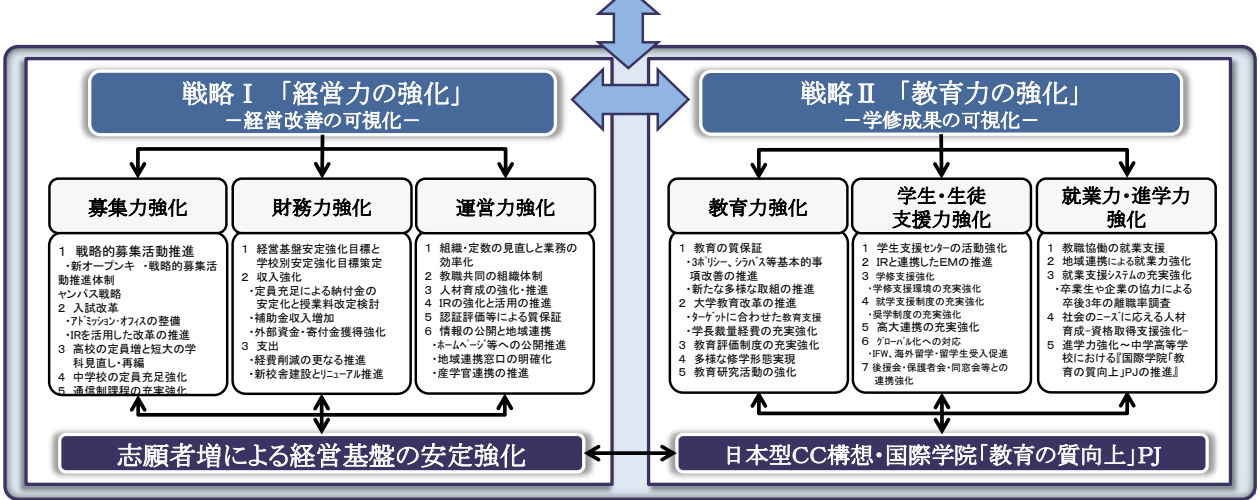
2016-2020
経営基盤の安定強化

建学の精神に基づいた人材の育成

経営目標 「礼をつくし、場を清め、時を守る」教育方針の下に国際社会の中で生き抜き尊敬される「人」を育成するため、安定的学校経営の強化を目指す。

社会の要請
ステークホルダーの要請

経営戦略の基本方針
KGブランドの確立
教育研究の質保証



こうした状況の中で、大学は何をやっているのかといった批判が大きく、限られた年数の中でいかに効率よく学ぶかが問われています。KGブランドの中身はまさにそこにあるのです。理事長の教えに立ち返ると、人間力のベースは、志や意欲、教養にあるのです。KGブランドの確立のために絶対欠かすこと

ができないのが「人」です。全てに人が関わります。志が高く愛情をもち、社会貢献をしようというマインドが高まらないと、どんなによいシステムがあっても、理念を掲げても動かないのです。学生や教職員とともに一丸となり、同じ志を持ってKGブランド確立に向けて邁進したいと思えます。



国際学院埼玉短期大学 概要

創 立 1963年
 大学設置 1983年
 設置者 学校法人国際学院
 所在地 〒330-8548
 さいたま市大宮区吉敷町2-5
 電 話 048-641-7468
 学 科 幼児保育学科
 健康栄養学科
 食物栄養専攻／調理製菓専攻
 ホームページ <http://sc.kgef.ac.jp/>
 取引店 大宮支店